

<書評>小笠原賢二『拡張される視野-現代短歌の可能性』,『時代を超える意志-昭和作家論抄』 : 状況と超越と

著者	宮内 豊
雑誌名	日本文学誌要
巻	66
ページ	106-107
発行年	2002-07-13
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020235

〈書評〉

小笠原賢二

『拡張される視野——現代短歌の可能性』、
『時代を超える意志——昭和作家論抄』

状況と超越と

宮内 豊

昨年晩秋から歳末にかけて、小笠原君が二冊の評論集を出した。一冊は昭和小説家論、もう一冊は現代短歌論である。遅まきながら書評を書く。

批評にもいろいろな書き方があり、いま仮りに共感や理解の批評と、問題提起やカラミの批評に大別すれば、小説家論は前者、短歌論は後者に相当すると、大まかに云える。批評としてどちらも必要なのだが、小笠原君の近著に限っては、私は後者をより面白く読んだ。それにはもうひとつ、私が現代短歌の世に不案内なため、好奇心が働いたという事情も加わる。何もかも新鮮で、教わることが多いのである。小笠原君の意図には反するかもしれないが、正直なところ、現代歌人がこんなに頑張っているとは思っていなかった。もちろん、小笠原君の選んだ佳品を通してそう思うのだから、素人が遠見の見物をしていられるようなもので、距離を詰めれば、小笠原君の危機意識や焦燥感の方が実情に合っているであろう。もともと、その小笠原君自身も純粹に歌壇内部の人ではないらしい。すくなくとも自分ではヨソ者の意識をもって観察し、書いているようである。

また歌壇の方でも、それ故に小笠原君の批評を必要としたのであるらしい。反撥はあっても、そういうことであるらしい。

小笠原君の現代短歌批評の骨子は、短歌滅亡論の再提起である。滅亡論自体はけっして新しいものではない。自身でも概説するように近代短歌はむしろ滅亡論によって鍛えられ、新しく蘇って来たのだが、現在また、近代短歌史上五度目の滅亡論を必要とする時期にさしかかった、というのが彼の診断である。たぶんそうなのであろうと、部外者の私は簡単に説得されるが、そのことと、前述した歌人も健闘しているのだという感想とは、矛盾するようで矛盾しない。

席重なる滅亡論にもかかわらず、何故近代短歌は新しい展開を遂げて来たか。新しい時代や題材や状況と果敢に取組み、その都度古い詩型に反省を加えて来たからである。そうした努力がここへ来て停滞ないし空転しており（それにはさまざまな原因があるのだが）、再度歌人たちに奮起を促すべく、小笠原君は殆ど獅子奮迅の勢いで論陣を張る。賛否は別として、気持がいい。また、歌壇の現状批判の形を取っているけれども、私の見るところ、彼のやっているのは現代日本の文化と社会全般のいわば定点観測でもあって、そのことが論にひろがりを与え、私のような圏外の読者にもリアリティーを感じさせる。問題は現代短歌だけのことではないのだ。

危惧をひとつだけ記すと、すくなくとも論争の場面では、小笠原君に状況主義や題材主義への傾きが感じられるが、そういうものにつきまとう危険も、小笠原君は知っているはずである。短歌に新しい生命を吹きこむのが状況や題材であるとしても、

他方では、それらを超越した高い批評精神と主体性の裏づけがなくては、作品が詩にならないばかりか、詩人自身も身をあやまつという教訓を昭和文学史は残した。細説はできないが、芭蕉の云った「不易流行」や「高悟帰俗」などの対語のうち、「不易」や「高悟」の現代的意義を掘り下げたら、立論のニュアンスもかなり変わったのではないかと思われた。小笠原君のなかに、そちらへの志向も確認できるだけにである。

なお、加藤克己という歌人と、谷川健一「うたと日本人」の存在を教えられたのが望外の収穫だったことも付記する。

短歌論に比して小説家論の方が、理解と共感を優先させていることは前述したが、加えて、「反時代的精神」や「時流に批評的に抗する」とかに焦点を絞っている点でも対照的である。

小笠原君がふたつの態度を意識的に使い分けたかどうかは不明でも、このヴェクトルの違いには釈然としないものも残る。坂口安吾から中野孝次まで、小笠原君は作家のなかの「不易」や「高悟」——つまりは状況超越とでも云うべきものの原点を探

り、その手順は丁寧である。まるで対象を見ない批評の横行する昨今、こうした愛情のある理解を私は奇貨とする。だが、読後しばらくすると、「待てよ」という気持になるのも事実である。評価が甘く緩くないかという気がして来る。具体例は挙げないけれど、小笠原君が好意的に評価するまさにその理由の故に貶下もできるのではないか、と思われて来るのだ。どんなものにも明と暗はあるが、小笠原君の小説家評には、暗を明にした

類の場で書かれたという事情も絡んでいるが、とともに、紹介と引立てを事とする文芸記者の経験が習性となっていないかと、小笠原君が苦労人であることを知るだけに、不安にもなる。

とはいえ、私はこれらの小説家論にいい刺戟を受けた。疑問や異論もうごめき、古い云い方だが、拔癢をおぼえた。そんな疑問のひとつを記すと、三島由紀夫論で、主に『太陽と鉄』を鍵にして三島美学の中核に「存在論的な難問」への果敢な挑戦を指摘した上で、そのレベルでは三島に関心を抱き、高く評価するが、政治的イデオロギーの次元ではあまり触手が動かぬ、とするのはどんなものか。『太陽と鉄』や「存在論的な難問」への注目には賛成だが、それだけでは三島の全体は説明できない。前述のとは別の動機からではあれ、小笠原君は三島に対して片眼をつむろうとしていると思うが、どうか。短歌論における、たとえば歌会始め参加問題その他へのこだわりとも、整合しないと思う。

限られた紙幅で、思いの十分の一も述べられなかったが、私は二冊ともに暗中模索のうちに書きつがれたと見た。矛盾や未解決の問題もすくなくない。だが、その多くは私自身が抱える問題とも重なっているのである。

(みやうち ゆたか・文学部講師／文芸評論家)

▽「拡張される視野」二〇〇一年十二月・ながらみ書房・三五〇〇円

「時代を超える意志」二〇〇一年十月・作品社・二五〇〇円
△著者 文学部講師／文芸評論家